

## 授業改善に関する実践的研究

### 10. 法学部・法科大学院の授業観察

米谷 淳

# 授業改善に関する実践的研究

## 10. 法学部・法科大学院の授業観察<sup>1</sup>

米谷 淳（神戸大学大学教育推進機構教授）

### 1. はじめに

ロンドン大学・大学教授法研究部が編纂した『大学教授法入門』（1982）は大学教員の必携本とも言うべきものである。そこでは授業観察は授業の評価のひとつの方法として紹介され、同僚や「訓練を受けたオブザーバー」に自らの講義を聴いて批評してもらうことは、自らが「長年にわたって自明としてきた」授業のやり方を見直すよい契機となると説明されている。授業改善は個々の教授者によってなされる個別的で閉じられた営みではありえない。受講する学生の声に耳を傾けることも必要であり、時には同僚や訓練を受けた観察者の助けを借りることも有用だろう。ところで、観察者が自分の専門分野と異なる科目の授業を観察し批評することについてはどうだろう。授業内容がそれほど理解されなくても、教員と学生の行動を観察して有益なコメントを述べることは可能だと考えている。

授業改善は事実に基づく正確で適切な授業の評価が前提である。授業の評価を正確で適切なものにして、有益な批評・助言を可能とするには、受講した学生によるアンケートだけでは不十分である。授業について教授者に有益な批評・助言をしようとするなら、評価者自らが授業に出席して教室の雰囲気、学生の反応、教授者の言動などを的確に把握・記述することが望ましい。実際に座席に座り、学生と同じ状態で授業を観察することは、授業者がまとめた授業記録や学生の感想文やアンケートを見る以上の収穫があるはずである。しかしながら、観察者が自らの専門以外の分野の授業を観察する場合、予備知識や基礎知識などにおいて学生にも及ばないような事態があり得る。そういう時にも、有益な授業観察は可能と考える。授業における教員と学生のかかわりを観察することにより、授業内容の分析に勝るとも劣らぬ有効な批評・助言ができるのではないか。そのためには、さまざまな授業を観察しながら、それぞれの授業の個性性と、それを超えたところにある共通性・普遍性を見極めていく必要がある。専門外の授業観察の経験を繰り返すことにより、授業観察の専門家となっていくことも可能ではないか。筆者はこうした考えの下で、授業観察の実践と研究に携わってきた。

神戸大学大学教育研究センター研究部では、これまで授業参観をファカルティ・ディベロップメントの重要な要素とみなし、授業参観を授業改善に活かすためのいくつかの取組を行ってきた。平成7年度から平成9年度までの3年間、授業を公開し、授業の相互参観を行った（米谷・山内 1996）。また、他の大学の公開授業に参加したり（米谷 1997）、行動観察の手法を授業研究に取り入れて授業のダイナミクスをとらえようとしたり（米谷 2001）しながら、授業観察者（＝授業評価者）としての観察眼を養おうと努めた。こうした作業を通して大学の授業の構造と法則性が少しずつ明らかになってきたように思われる。しかしながら、学内での授業参観は思うようにうまくいかなかった。平成7年度からの3年間に3つの授業について、それぞれ10数回実施したにもかかわらず参加者は5名だけであり、そのうち1名は学外の教員であった。こうした状況や学内で授業参観を展開することへの抵抗・反発もあり、その後筆者は実践・研究の主力をもちばら授業参観よりも授業評価、および、メディア活用や集団技法による授業方法の開発・改善に投入してきた。こうした状況が変化したのは平成15年度からである。

平成15年の秋頃、科研プロジェクトへの協力依頼により法学教育についての評価作業に取り組むことになった。法学部は平成16年度から法科大学院をスタートさせることになっており、認証評価のためにも授業の評価が必要であり、授

<sup>1</sup> 本研究は平成15年度～平成17年度文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）「法科大学院における教育手法の総合的研究と実践的モデル開発」（代表 磯村保）の支援を受けて行なわれた。

業評価や授業観察の実践・研究に取り組んできた研究部の力を借りたいという依頼を受けて、米谷と山内が法学教育研究会のメンバーとして参加しながら、いくつかの作業を行い、助言・指導をしていくことになった。その手始めに行ったのが今回報告する法学部と法科大学院の授業観察である。

授業観察に携わったのは筆者、そして、筆者と同じ大学教育研究センター研究部で長年、授業評価や授業研究に携わってきた研究者の2名である。専門はひとりが心理学であり、もうひとりは教育社会学である。ともに授業参観の経験を5年以上もっているが、どちらも法学は専門外である。それ故、われわれが法学の授業を観察することにあたり、授業内容を検討の対象としないことにした。筆者は、話し方、板書の仕方、マイクの使い方、教材などの授業方法にかかわる事項、及び、教員の学生への接し方や態度や授業への熱意、さらに、学生の反応を専ら観察することにして、法学の授業の中で教員と学生がどのように関わりあっているかを検討することにした。この論文では、授業で何が見えたかを基に、それぞれの授業場面の特徴について考察し、スタートしたばかりの法科大学院の授業について評価を試みることにする。

## 2. 方法

観察者 高等教育研究機関で長年、授業評価や授業研究に携わってきた研究者2名。

期間 平成16年4月12日～5月26日の6週間。

観察対象 当初は法学部、法科大学院の授業をあわせて10コマ観察する予定であったが、実施できたものは8コマ(8科目)であった。それぞれの授業の選定は法学教育研究会のメンバーである法学部教員によって行われ、担当者には事前にメールにより授業観察を申し入れ、承諾を得た。2科目が実施できなかった理由は、ともに観察者が急に会議に出なければならなかったためである。また、1科目は最初に予定していた日に会議が入ったために次の週に変更した。表1に観察した授業のリストをあげる。表1で担当者が同じ記号であれば、同一の担当者が行っていることを意味する。観察した授業は8コマであり、そのうち2つが学部の講義であり、残り6つが法科大学院の授業であった。法科大学院の授業は、3つが講義であり、残り3つは「拡大オフィスアワー」または「対話型演習」が科目名の一部となっていた。

表1 授業観察を実施した授業一覧

|   | 年月日       | 曜日時限 | 対象学生  | 担当者 | 授業形態 | 備考        |
|---|-----------|------|-------|-----|------|-----------|
| 1 | 2004/4/12 | 月4   | 学部    | A   | 講義   |           |
| 2 | 2004/4/14 | 水1   | 法科大学院 | B   | 演習   | 拡大オフィスアワー |
| 3 | 2004/4/19 | 月3   | 学部    | C   | 講義   |           |
| 4 | 2004/4/26 | 月4   | 法科大学院 | B   | 演習   | 対話型演習     |
| 5 | 2004/4/28 | 水1   | 法科大学院 | D   | 講義   |           |
| 6 | 2004/5/12 | 水2   | 法科大学院 | D   | 講義   |           |
| 7 | 2004/5/24 | 月3   | 法科大学院 | E   | 演習   | 対話型演習     |
| 8 | 2004/5/26 | 水2   | 法科大学院 | F   | 講義   |           |

観察方法 観察者は、教室の最後列で、教員と学生が見渡せる位置に着席し、授業開始から授業終了まで在籍して、授業観察をした。ビデオカメラやオーディオカセットなどの機材は持ち込まず、気になった点はすべてノートに手書きした。教員の言動と学生の行動だけでなく、教室の状態(暑さ、騒音など)についても気がついた点は書き留めるようにした。観察はできるだけ2名で行うことにしたが、半数近くが1名のみとなった。そうしたこともあり、事後のクロスチェック等を行っていない。

### 3. 結果 - 授業の記述 -

ここでは1名(筆者)の観察だけをもとに、8つの授業において気になった点、重要と思われる点を記述する。なお、以下の記述において教員や学生の名前など、個人が特定される場合には「 」のように伏せてある。文中のTは教員、Sは学生である。

#### (1) 学部の講義

##### a. 授業1(教員A) 15:20~17:00

- 3: 17 T入室。
- 3: 20 Tマイクを叩いて確認。「それでは時間が来ましたので始めます。」  
資料をとるよう指示。1人1枚であることを徹底。
- 3: 25 授業が始まり板書が進むも、S2-3人遅れて入出。300人教室はすでに6割程度埋まっている。  
私語少ない。窓はあけられ涼しい風が入っている。騒音は小さい。携帯電話でメールを読んだり  
打ったりしているSが2名みられる。
- 3: 28 T「皆さんは すでに履修され、単位をとっているのです、これは大丈夫だね。」とSに質問するが、  
Sは誰も反応しない。
- 3: 30 T前回の資料を教卓に置き、「もらっていない人はここに取りに来て下さい」と言うと10名程度のSが  
取りに来る。
- 3: 35 講義が続く。話し方に切れ目がなく、板書中にも話し続ける。また、前回の配布資料にあるものを、  
ひとつひとつ板書している。
- 3: 37 T「思い出していただけましたかね。(思い出した人は)手を挙げていただけますか。」(2・3人の手が  
上がる。)  
「イエーイ・・・こんなことは言わない方がいいんですね・・・」
- 3: 39 S1名室外に出る。遅刻者は全く入ってこない。
- 3: 45 S女子2名あくび。女子2名・男子1名が居眠り。
- 3: 47 T「以上、 をくどくど説明してみました、ここまでは条文を読めばわかる話である。私の話は特  
別に何かを加えているわけではない。
- 3: 49 少し風がやみ、暑さを感じられる。私語をする学生が出てくる。  
T「まあ雑談ですけど・・・まじめに聞いてほしいんですけど・・・」Sの反応がなくなっている。  
T「眠くなってきたなあ・・・」とつぶやく。
- 3: 52 S女子1名が私語。
- 4: 05 T板書を小さく書いたので、「後ろの人見える?見えないなら手を挙げて。」・・・Sの反応がない。  
T小さい文字で書き続ける。
- 4: 10 S男子1名退出。T「こんな話しもあるが、言い始めるときりがないのでやめておきます。」
- 4: 12 S後ろから2列目の男子が後ろの席の男子に「あつい」と言う。
- 4: 14 Tの話しが単調で、長く、ポーズが短い。板書も小さくて見にくい。
- 4: 16 T「時間が来たので5分間休憩し、今回のレジュメの方に進みたいと思います。リフレッシュして下さい。」
- 4: 20 T「それでは時間が来ましたので、席について下さい。今回のレジュメを見て下さい。・・・」講義再開
- 4: 25 T板書中に「時間の関係でいちいち書いていっているときりがないので、レジュメに書いてあるので、  
それをみてもらうことにします。」

- 4: 31 S 後方の女子学生が缶コーヒーを飲みつつ隣の学生と私語。外の道路で車がバックする音（警戒音）が聞こえる。工事の音も聞こえる。蒸し暑さ一層高まる。
- 4: 37 T の板書の合間にする、つなぎの説明が速くて聞き取りにくい。
- 4: 45 T 「これが今日のやることの 2 番目です。それでは に進もうと思います。」
- 4: 55 T 「ここまでではご理解いただけました。（参考書を）読んできていただけますればご理解いただける話であります。」
- 4:59 外から工事中の塗装の臭いが教室に入り込み、蒸し暑さとあいまって非常に不快な状態。  
T 「次回皆さんに読んできていただきたいことは、・・・、それらと との関係を考えてきてほしい。」  
S は T の終了の合図の前から片づけを始めている。
- 5: 00 授業終了。

**b. 授業 3（教員 C） 13:20～15:00 但し授業観察は 13:30 から開始**

- 13: 29 すでに授業は始まっており、T は前回の授業の復習をしていた。（T は次に法科大学院の授業があり、教室移動が大変なので授業時間を 10 分前倒しているとのことであった。）
- 13: 30 チャイム鳴る。  
T 「1 日 30 分授業が終わってから復習で教科書を読むのは皆さんとのお約束でしたよね。」
- 13: 40 T 「もう一回繰り返しますと・・・。ざっくりばらんな言い方ですけれども・・・。これから話すは、～の問題を理解するということ。・・・では順番にみていきましょう。」  
T の話しに切れ目がなくなることがある。但し、強調する場面でゆっくりしていねいに反復して説明している。また、例示も卑近なものを使ってわかりやすくしようと努力していることがわかる。
- 13: 51 S 男子 1 名入室。
- 14: 02 S 男子 1 名入室。
- 14: 05 相変わらず私語がない。
- 14: 08 S 女子 1 名入室。空いている席が無いのでいったん教室の外に出る。再入室してパイプ椅子を探す。  
T 板書の際にいくつかの色チョークを使用。最後尾の席からは白は見えるが、赤は見にくく、青は見えない。
- 14: 10 S 男子 1 名いったん退室して、再入室。  
T 「とりあえず今日頭に入れておかなければならないことは・・・」この話し方が速すぎて、ノートテークはむろんのこと、聞き取るだけでも難しい。話しについていけない。
- 14: 15 T 「ちょっと 5 分間休憩しましょうか。あまり時間が無いので 2 時 20 分まで休憩とします。」
- 14: 20 T 「いいですか」授業再開。休憩時間中に板書していたものを授業再開と同時に読み上げ、単語説明。但し、その後の説明が平板で速すぎる。しかし、考えながら聞けば内容は対して難しいことではないので、少し時間をとればわかる。
- 14: 40 T あわてて、自分で話しを混乱させる。
- 14:45 教室全体は集中力が持続中。寝ている S はいない。ひたすら聴き、ノートを取っている。
- 14: 50 このあたりは繰り返しが冗長すぎる。T の整理ができていないのではないか。  
T が「まとめると・・・」と話しを進めるが、一番大事な部分なのにごちゃごちゃしており、わかりにくい。また、とるべきノートが長すぎる。
- 14:52 S 最後列から 1 つ前の女子学生が机の上にオーディオカセットを置いて、録音していたことがわかった。

授業終了

(2) 法科大学院の講義

a. 授業5 (教員D) 10:50~12:30 小教室 N=24

- 10: 50 チャイム鳴る。Tの入室がやや遅れる。1時限の授業の学生の質問への対応で来るのが遅れたことを説明。初回のため挨拶に続いて自己紹介をする。次に、法科大学院の学生がよく質問をし、熱心であるとほめる。この授業が固定席であることを確認して、授業の進め方の説明に入る。テキスト、資料について説明する中で、Sに質問。T「テキストと資料を全部読んだ人。」 S12名の手が上がる。  
T「 (参考書)を全部読んだ人。」 S15名の手が上がる。
- 11: 00 T「早速、授業の内容に入っていきます。おことわりとして、私は法科大学院の授業内容をICレコーダでとって広告紙にのせることを許可してほしい。」 Sは了承する。(無言で了承)  
他の先生からの伝言(テキストの訂正)をする。
- 11: 04 T「それでは内容に入ります。今日は~ということにふれたいと思います。」教材の流れに従って説明する。話し方がいい。やわらかいトーン。落ち着いた話し方で間も十分。  
T「さん、~と~との違いは？」 S答える。
- 11: 10 Tは~のイントロをしっかりといいに解説している。黒板を消すタイミングは適切。ノートテークの間をとってSが考える時間を与えようという配慮がうかがえる。  
T「予習してきていると思うが、~について答えられる人。」 1名のSが挙手し、正しく答える。
- 11: 18 T黒板の片方で「まずこっちね」といって黒板の文字をトントントンと叩き、説明を始める。  
その後、教室の中央に向かって歩き出し、再び黒板に戻る。こうした動きを11: 21まで3回繰り返す。
- 11: 26 T憲法についての質問をして「誰か手を挙げて。」 S1人、答える。T「他に？」 別なSが答える。  
教室の外の工事の音がうるさい。Tは色チョークを使い分けながら、黒板にグラフィックな図示。  
黒板の使い方は計画的で見やすく、工夫している姿勢がうかがえる。黒板をいっぱいを使う。ディスプレイとしての黒板の機能をよく活用している。
- 11: 28 T「そこですね・・・」注意を引こうとする姿勢、間をあけて話す。
- 11: 33 Tは板書をし、その後教室内を歩き回りながら説明する。
- 11: 39 T「さきほどの様子を見ると皆さん方はかなり予習されていますね。」  
ある質問に一人のSが完璧に答えた直後に「すばらしい、すばらしい、実に・・・ここを説明しなければならぬことが多いのだが、皆さん実によく復習していますね。」
- 11: 40 T話しながら教室を歩き回る。2回繰り返す。
- 11: 50 授業開始後約1時間経過。S全体は集中がとぎれていない。PCでノートテークする者、ほお杖をしながら考えている者、ひたすらノートに字を書き続ける者など。少し疲れを見せるSが1名いるが、持ち直す。黒板とTを注視しており、内容について知っているという感じ。
- 11: 55 S2名背伸び。このあたり、Tは次々にSをあてて質問し、答えさせる。Tの表情、口調は終始一貫して柔らかい。ペースも変わらない。話し方がほとんど同じ(適度なスピード)であり実に聞き取りやすい。説明中にスマイルも見られる。
- 12: 05 Sから質問を受ける。T「難しい問題やなー」と言いながら丁寧に答える。  
別なSからの質問にも「難しいんですよ。これにはいろいろな説があり・・・」と説明。  
また別なSの質問には「かなりレベルが高いな」と言ってから説明。他のSはこれらのやりとりを

全員見ている。

- 12: 10 教室のヒーターによりややぬくもってきたので、少し暑くさえ感じられ、観察者は眠たくなる。しかし、SとTとのやりとりの最中、S全員Tをずっと注視している。
- 12: 14 T「じゃ次にいきますね。」
- 12: 23 Tは教卓の前に戻ってきて説明。
- 12: 30 チャイムが鳴る。Tは今日の授業内容の確認をし、次回の予告と予習の指示をする。T「質問があればいつでもOK。ウィークデイの 時以降は研究室にいる。アポなしでもよい。以上です。本日はこれで終わり。ありがとうございました。」
- 直後に1人のSから指摘があり、板書の訂正をした。

**b. 授業6 (教員D) 9:00~10:40 N=60**

- 8: 45 晴れ。初夏を思わせる日差しだが、教室内は爽やか。授業15分前に到着して教室の雰囲気を楽しむ。すでにSが3人いる。
- 8: 50 教卓付近から円心状に25人以上のSが着席する。これは教養の授業とは全く違う光景である。教卓や黒板に近いところから着席していくところに法科大学院の学生たちのやる気とこの授業に対する意気込みを感じる。
- 9: 00 Tチャイム中に入室。「おはようございます。ゴールデンウィーク明けですが、いかがですかね……。もうそろそろ他の授業でも課題を出すようになって、皆さん寝る間もないくらいの人までしているかも……。それにもかかわらず、皆さんも勘がよいからわかると思いますが、私の授業でも課題を出します。今日も用意してきました。わりとオーソドックスで簡単なので、来週のこの時間にレポートを提出してください。分量は2500字/頁で2枚。大体3000~5000字。やっているうちに5000字で書ききれないという方が出てくるかもしれませんが、短く書くのも技術です。そのうち新司法試験のやり方がわかってくると思いますので、課題の書き方もそれに合わせてやりたいと思います。」
- 9: 07 T「先週の課題についてやってきたことを隣と人とか、誰か相手を見つけて3分程度話し合い、1分でまとめてみてください。」12~15グループがただちにグループセッションを始める。20名以上はせず。
- 9: 10 T「(発表を)やりたい人、手を挙げて」1名のSが答える。T「君、すばらしい。」
- Sは先週の内容をまとめて報告、この間Tはポイントを板書。
- S1名入室。
- 9: 12 T黒板を見ながらマイクを持ってコメント。
- 9: 14 S1名入室。
- 9: 20 外の騒音(工事)が聞こえてきたところ1人のSが立ち上がって教室後方のドアを閉める。
- T「希望課題をやってきた人いる？」S1名手を挙げる。Tはマイクを渡して答えさせ、やりとりする。
- T「他はどうですか？」別なS1名が手を挙げて答える。T「どうですか 君」と、また別なSにコメントを求める
- 9: 25 T 君の発言についてコメントする。最後に「ありがとうございます」とまとめ、「で、~の話ですね。ここから今日の話に入っていくんですけど」と内容の説明を始める。
- 9: 35 T「結論は自分で考えてきちんと論を立てられればよい。通説はおさえとておくが、論がきちんと通っていればよい。皆さんはこうしたことを身につけてほしいんです。」
- 9: 45 T「誰かに読んでもらいましょうかね。君あたったことある？」 S「まだです。」 T「~のとこ

るから読んで。」マイクを渡すタイミングがやや遅れる。

- 10: 00 T「～について誰かに聞きます。」と一人のSに答えさせ、「他」と言って別なSにも答えさせる。Sはあてられるとすぐに答える。T「まだしゃべったことのない人ある？あと10人ぐらいいるようだけど。君はあたったかな？」 「～ぐらいしか思いつかない。」
- 10: 10 Tが説明をしている最中に1人のSがTに質問をし、その後、SとTとでやりとりが始まる。
- 10: 16 授業開始後75分経過。教室全体はシーンとしている。Sの集中はとぎれていない。S1名背伸び。
- 10: 22 よそ見するSが出てくる。
- 10: 27 Tがあげた判例が別なものであることを一人のSが指摘し、Tが訂正する。
- 10: 30 T「さあ次にいきましょう。」
- 10: 38 教室の窓際を誰かが通るが、それをよそ見したSは1名のみ。  
T「今日は～までにしたいと思います。一応、今日の話はここまで。レポートを出しますね。」  
Tが資料を配布。配布中に学生が話をしだす、2人退出。
- 10: 40 チャイム鳴る。T「お疲れ様でした。終わります。」終了と同時にS4名が教卓に来てTに質問する。

**c. 授業8 (教員F) 10:50~12:30 N=63 (m 49, f 14) at 11:04**

- 10: 50 授業開始前からTAがレポートの返却をしている。教卓前が資料配布でやや混雑する。
- 10: 54 T「(配布資料を見ながら) こういうものをまとめちゃうと(君らは)『覚えておけばよい』となるだけで、自分でまとめようとしなくなるという恐れもあるが、ここではこうしちゃいました。」歯切れのよい説明。
- 11: 04 ここまでTAが学生の出席調べ。この間Tはプリントをもとに講義を続けている。  
T「これについて私なりに勉強してみましたけれど、これについてきちんと書かれたものはなかった。それで自分が論文を書くならどうしようかと考えてみた。」  
「昨日PCでレポートを見たところ、10通ほど来ていまして、送られた時間が午前1時、2時、3時、4時とあって、皆さんの健康状態を慮って、最低限の人間らしい生活を保障できるようにしたいと思いました。(クラスのあちこちから笑いが聞こえる。) レポートのコメントですが、よくがんばったと改めてほめたい。」
- 11: 14 TがSからの質問に即答的に答えている。但し、質問をしている学生がマイクを使っていないため、聞き取れない。こうした場合、Tが質問を反復するか、Sにマイクを使わせるかすべきだろう。  
Sからの質問に対して、レポートを書いた学生の中から特定の態度(賛成、反対)の者を挙手させ、その中から1名(女子)を指名して答えさせる。さらに、マイクを与えて反対の立場の学生に反論を言わせる。2人目にもマイクを使わせる。事実上のディベートとなっている。
- 11: 30 S「わかんなくて質問なんですけど・・・」  
別なSからの質問に対してT「これについて面白い教材があります。判例教材 番を見てください。」  
教室はエアコンが効いており、さわやか。騒音はなく、マイクのせいもあり聞き取りやすい。  
S全員の集中も高い。
- 11: 40 Tマイクがよく通り、力強く話している。
- 12:00 T「続きまして～の問題に入っていこうと思います。私がしゃべりすぎなので、レジュメの問いに従って答えていてもらいたいと思います。」といい答える学生の順番を指示する。  
このあと、あるSとのやりとりが続くが、実に熱のこもったもので、SもTも真剣に考えようと

している。

12:30 チャイム鳴る。T「半端になるのであと5分だけ続けます。」と言って学生への質問を続ける。学生は皆よく事前学習をしてきており、ほとんど完璧に答えている。さらに突っ込んだ質問をする学生も2人いた。緊張度の高い授業で、密度も高い。学生の自主学習を中心に授業を構成しようとする意気込みを十分感じた。

### (3) 法科大学院の演習

#### a. 授業2 拡大オフィスアワー(教員B)

- 9: 10 教室は改装されており、情報コンセントが付いた新しい机とすわり心地のよいOAチェアが置かれてあり、大変快適。中央に教卓が置かれ、Sは1つずつイスをあけて座っており、3分の1がPCを使っている。(S24名、PC8名)
- 9: 16 S1「先生、ちょっとチョークがつくよ」。T「ありがとう。他の人からなにか・・・」。S2「・・・借金業者・・・公序良俗違反・・・事例にひきつけて・・・」。T「実はきのうの授業が終わった後で先生と話をしたのだけれど、不法・・・については難しいんだよ・・・。では、説明してみようか。(板書し始める)」このあとTとS2とのやりとりが続く。
- 9: 26 T「・・・待ってくれよ。できるだけ単純な例にしようか・・・」
- 9: 30 T「(S3に対して)何故ですか。・・・これについては答えを用意してなくて聞いているんですが。」
- 9: 35 T「これについては結論が出ていない問題なんです。が、ちょっと考えてみよう。・・・小六法をちょっと見せてもらえますか。・・・ちょっと待ってくださいね、ごめんなさい。」この合間に、2組の学生同士で話し合いが始まる。他の学生も六法を見たり、前を向いて考えたりしている。
- 9: 55 T「最初に質問した君、・・・は認められると思うか。どうですかね。」S4答える。T「君の場合は、身体的自由はその程度ですか。・・・(学生とのやりとりが続く。)...ここまで話してくると私は答えられないということがわかる。でも、ここで皆さんに考えてほしいのは、誰でも同じ答えが出るものは問題とならない。これについて、また、うまい答えがみつかったら来週説明します。他にありませんか。」
- 10: 12 学生の集中力やや落ちる。
- 10: 12 T「えーと、他どうでしょう。私の方からも質問があります。2通り用意してきました。(授業の進め方について学生に手を挙げさせて選ばせる)・・・このあと10時40分まで全体像の確認をし、次回は質問をすることにしよう・・・。皆さんは判例の理解、法律の学習でいっぱいだと思います。が、全体像の把握ができていないと～、実際の新司法試験に予想される問題や実際の法律相談の事例では、それがどの問題なのか、どういう部分が重要なのかを見極めることが重要です・・・」
- 10: 41 チャイムがなったので終了。

#### b. 授業4 対話型演習(教員B) 15:20~17:00 N=33 (m 25, f 8)

- 15: 20 Tチャイムと同時に授業開始。挨拶。資料配布。ネット掲示板についての説明。パスワードなど。ネット掲示板はobligationではない。授業を受講する学生の広場として自由なディスカッションをする。管理者はTであるが、できる限り介入しない。
- 15: 25 T「S1さん。」・・・このあとS2とTとのやりとりが10分続く。

- 15: 35 T「S2君がずっと答えたから、じゃS3君。」このあと、S4、S5と30名に次々と質問をしていく。途中で「ちょっと初歩的な知識ということになるんですけど確認しておきたいのは」といった説明をはさむ。
- ある質問については答えたい人に手を上げさせ、ひとりずつ言わせながら黒板に意見をまとめている。また、別な質問では、一人のSが答えを言ったあとで、「じゃあ逆の立場で説明してくれる人は？」と問いを続ける。
- 挙手する学生がいないときには、あるSに目をつけて「目が合ったね・・・ハハ・・・その笑いは何だ(部屋がわく)」と楽しそうに答えを要求する。ソフトな口調とやさしい表情。
- 17: 00 T「次はこういう風に予習をしてきてください。」と具体的な説明をして終了。

**c. 授業7 対話型演習(教員E) 13:30~15:10 N=54 (m 30, f 24) PC使用4名, PCでノートテーク1名**

- 13: 50 晴れ。初夏を思わせる暑さ。梅雨入り後の晴れの日。室内はエアコンが効いて快適。窓を閉めてあるの外の音は聞こえない。ブラインドで日差しがさえぎられている。
- 13: 51 授業最初からTが質問している。Sも即答しており、質問と答えがスムーズに流れている。
- T「誰か、手が上がらないぞ」 S1名挙手、即答。
- 13: 55 Tが板書で判例の所在を明記し、必要なら読んでおくよう指示。
- 13: 57 Sにケースブックを読み上げさせる。Sの声が小さいのでT「もっと大きく」と促す。
- 別なSにTが質問をすると、Sは「どういう意味か」と聞きなおす。
- 14: 07 今度はSがTに質問。T「どうでしょう。誰か私に代わって答えてくれる人は？」
- 14: 12 2名のSが答えたあとで、T「私自身の考えは・・・」。「さあ、今の点、重ねて何か質問ありませんか？ さあ、それでは～の事件について～。それじゃ、新たな質問を皆さんに出しておいたと思うんですが、手が上がらないので さんどうですか」 答えられず。「君」「予習忘れました。」
- このあたり、学生の声が聞こえないことがある。きちんとマイクを使わせるか、立たせるべき。
- T「～いろんな知識を整理しておいてくださいね。何か質問ありませんか。それではスピードをあげまして～。」じつにフレンドリーで丁寧な話し方であり、なごやかな雰囲気を保とうと努力している様子が伺える。
- 14: 20 Sが答えている最中に、窓の外を車が「さおや～さおだけ～」というアナウンスを流しながら通り過ぎる。T「負けないで、大きな声で。君たちは法廷に立つわけだから、騒がしい中でも相手に主張をわからせるだけの大きな声で～」・・・
- T「このあたりは授業でゆっくりやっている時間はあまりありませんので、しっかりやって下さい。～も必ず目を通して下さい。その上で質問やわからないところがあれば掲示板にあげておいて下さい。それを見た上で、必要とあれば授業でとりあげます。」
- 14: 45 S1名居眠り。エアコンの効きが悪くなる。日差しが強くなり、Sの声も聞き取りにくく、話のすじがつかめない。
- Sとのやりとりが続く。その中で、質問したSに、その質問について「どう思います」と返す。そして、次の学生にも聞く。
- 14:50 T「残りの10分は後回しにしていた判決をとりあげます。」
- 15:00 T「何か質問ありませんか。」2～3分に1回の割合でSが自発的に質問をする。最後に次の授業についてのアナウンスをして終了。

#### 4. 考察

法学部の講義、法科大学院の講義、法科大学院の演習の3種類の授業を観察した。第一に印象に残ったのが、法学部と法科大学院の講義の違いである。法学部の講義は伝統的とも言える典型的な大規模知識伝達型授業であった。これに対して法科大学院の講義は、講義という授業形態名にもかかわらず、授業者は頻繁に学生に質問をし、学生からの質問に答えていた。また、2名1組になって先週の授業について話し合い、それをまとめて報告するというグループセッションをとり入れた授業も行われていた。法学部の講義では、授業者の声に反応する学生はあまりいなかった。せいぜい、「先週の資料を取りに来てください」と言ったときに10名程度の学生が教卓に集まっただけである。こうした授業者と受講生との関係性の違いと学生の反応性の違いが第一に目に付いた。

学生の意欲や集中についても大きな違いが見られた。学部の講義では授業開始60分前後に1回5～10分の休憩を入れ、学生をリフレッシュさせていたが、法科大学院の授業では授業時間が90分ということもあってか、講義でも演習でも、そうした休憩はなかった。それにもかかわらず、学部の講義では後半で居眠りをしたり、私語をしたりする学生が数名みられた。また、遅刻者は授業開始30分ごろまでだらだらと続いた。これに対して、法科大学院の授業で遅れてきた学生はいなかったし、居眠りをした学生も1つの授業の最後の方でいただけであった。講義といえども、次から次に問いに対する答えを考えるように促され、マイクが回ってくる状況であり、居眠りをする余裕はない。こうした緊張感ほどの授業でも感じられたが、学生は他の学生の答えを真剣に聞き、時には教員に納得するまで質問を続けるなど、熱気と意欲の方がより強く感じられた。学部の講義でも、思ったほど私語はなく、居眠りも教養の授業と比べて少ないように思われる。矢継ぎ早に用語や概念が説明され、板書を見落とさぬよう、書き残すことのないように努めながら、講義を聴き落とさぬようにしているには大変な意志が必要であり、やる気がなければついていけないだろう。そういう意味では学部の講義でもやる気は感じられたが、教員の質問に対する答えの出方や教員への質問の数、手の上がり方など、積極性と主体性においては法科大学院の方が勝っているといえるだろう。

法科大学院の講義と演習については、どちらもそれぞれの趣旨に沿って、効果が上がるよう教員が工夫していることがうかがえた。説明は丁寧で、落ち着いており、学生の反応を確かめながら次に進もうとしている。また、本当に理解しているかを質問などでチェックしていこうとする姿勢がありありとみえた。演習については、予習をしてこないで質問に答えられない学生もいたが、少数であり、多くの学生は教員から「すばらしい」などと評価されていた。教員も学生の熱意や勉強時間や予習の徹底について感心している様子で、教員と学生が目標に向かって強い意志をもつとともに向かっている様子がみてとれた。板書もチョークの色分けを丁寧にし、見やすいシエマを余裕を持ってきちんと書くなど、じつに模範的であった。これに対して、学部の講義では2つの授業とも時間に余裕がなく、大教室で後ろの席の学生のことを気にしているせいか、字を書くことばかりが先にたち、簡潔で明快な板書はあまりみられなかった。大教室では黒板を使わず、ノートを読み上げるような講義の方が向いているのではないかとさえ思われた。また、法科大学院の授業のいくつかでは、教員がBBS（電子掲示板）を立ち上げて、学生の交流（討議）の場を設け、授業の補助と使用としていた。さらに、教室は情報コンセントが完備され、授業中にノートパソコンをインターネットに接続して、判例集や六法などをアクセスして見ている学生も10名以上確認できた。

法科大学院はスタートしたばかりで、教員も学生も新しいシステムをつくりあげていこうとする意気込みが感じられた。対話型演習に使用する演習室は、学部の講義で使用する階段状の大教室とは異なり、きれいでゆったりとしており、イスも机も新しく、情報コンセントなどの設備も充実していた。教材も授業のために時間をかけて作成されており、授業に関する部分にはマーカーや書き込みがなされ、かなりの学生がしっかり予習をして授業に臨んでいる様子が伺えた。こうしたハード面での新鮮さはいつかは失われる。そのときに授業も新鮮さを失うことのないよう、たゆまぬ改善と刷新が必要であろう。とはいえ、法科大学院の教育は出発したばかりである。新たな授業づくりが始まったばかりと考える。観察し

た授業はさまざまな創意工夫がはしばしに感じられるものばかりであったが、それらがよい成果を生んで定着し、そのうちに神戸大学らしい法科大学院の教育スタイルが作りあげられることを期待したい。

最後に、学部の授業と法科大学院の授業を観察することにより確認できた事項について触れておく。それは、従来の講義形式の授業では学生が 50～60 分で集中力がとぎれるということである。これは他の大学の授業を観察したときにも確認された（米谷 1997, 2001）。一方、法科大学院の授業では集中は 70 分以上も持続していたが、これはインタラクティブな授業形式だけでなく教員と学生の意気込み、すなわち、モチベーションの高さによるものとも思われる。法学部では 100 分授業であるが、60 分前後に休憩を入れて集中力を回復させるよう努めている。現在、神戸大学の授業は一部の例外を除いて 90 分授業に統一されたが、50～60 分で一端休憩を取るような手立てのある 100 分授業とどちらが学生の集中力を保つのに適しているかは言うまでもない。90 分間休みなく、早口で一方向的に話を進めようとしてもうまくいかない。色々工夫するべきである。

#### 文献

- ロンドン大学・大学教授法研究部（喜田村・馬越・東 訳）1982 『大学教授法入門 大学教育の原理と方法』玉川大学出版部
- 米谷淳・山内乾史 1996 「授業改善に関する実践的研究 3 . 授業参観についての一考察」, 大学教育研究, 5, 59-63.
- 米谷淳 1997 「学生の背中から学ぶ 京都大学実験講義観察記のためのデッサン」京都大学高等教育教授システム開発センター編 『開かれた大学授業をめざして - 京都大学公開実験授業の一年間 - 』玉川大学出版部 Pp.66-82.
- 米谷淳 2001 「授業観察事始め 授業というフィールドにおける本格的な行動研究をめざして」京都大学高等教育教授システム開発センター編 2001 『大学授業のフィールドワーク - 京都大学公開実験授業』 玉川大学出版部 Pp.74-98.

# An action study on the improvement of teaching and learning in general education:

## 10. Behavioral observation of teaching and learning in Faculty of Law and Law School

Kiyoshi MAIYA (R.I.H.E., Kobe University)

In order to evaluate new educational program of Law School, behavioral observation was conducted by two researchers for eight courses. Two undergraduate courses (lectures) in Faculty of Law were compared with three graduate lectures and three graduate seminars in Law School. As a result, even lecture classes of Law School were found to be different from those of undergraduate lecture class of Faculty of Law. The former was much more interactive than the latter, and the students were more concentrated in the former than the latter. The seminars were as interactive as the lectures in Law School. It is suggested that the faculty staff on Law School intends to change traditional style of teaching and learning in Law education by designing interactive style of teaching and learning.